

第 109 回助産師国家試験分析報告

第 109 回助産師国家試験について、公益社団法人全国助産師教育協議会の立場から「助産師免許付与のために必要な能力」が測定できる出題か否かを分析した。

分析に当たっては、各設問の出題内容をタキソノミー分類および助産師国家試験出題基準目標別に分類した。

具体的には以下の 3 点を検討した。

I. 設問と解答肢の検討

II. タキソノミー分類および助産師国家試験出題基準からみた出題内容のバランス

III. 助産師免許付与に必要な能力（レベル）を測定する問題か否か

本分析結果が、第 109 回助産師国家試験において当該年度の助産師免許付与のための採点や合格基準の検討資料として活かされることを切に希望するものである。

分析結果を以下に示す。

I. 設問と解答肢の検討

設問と解答肢の検討については、1 問（午後問題 31）を不適切問題と判断した（表 1）。

全体的に、解答に必要な情報が適切に記述され、出題の意図が明確で基本的知識を問う問題が多かった。その一方で、明らかに誤りと思われる選択肢を含む問題、専門的な知識がなくても容易に解答できる問題（午前問題 18）、設問の意図と整合性がない選択肢が含まれている問題（午後問題 40）もみられた。

選択肢（正答肢）の総数は前回（第 108 回）の 133 肢と同数であった。また、視覚素材を用いた問題は 5 問であり、前回（第 108 回）より 2 問減少した。

II. 出題内容のバランス

出題内容のバランスについては「出題基準別にみた出題テーマ」（表 2）、および「出題基準（小項目）別にみた出題数と割合」（表 3）、「出題基準目標別の問題数とその割合」（表 4）を参照されたい。知識の想起・推定によって解答できる問題（タキソノミー I・I' 型）が 58.1%（第 108 回 65.4%）、複数の知識を統合して問題解決する能力をみる問題（タキソノミー II・III 型）は 41.9%（第 108 回 34.6%）であり、前回と比べてタキソノミー II・III 型の問題が増加し、タキソノミー I・I' 型の問題が減少していた。

助産師国家試験出題基準目標は、以下の 4 群 24 項目に分類される。

【基礎助産学】

- 1) 助産の基本となる概念と変遷、基本姿勢について基本的な理解を問う。
- 2) 女性の健康に関する支援のための基本的な理解を問う。
- 3) リプロダクティブ・ヘルスに関する支援のための基本的な理解を問う。
- 4) 妊娠による女性の変化や正常な妊娠・分娩・産褥の経過及び正常な新生児の経過や乳幼児の成長・発達における特徴について基本的な理解を問う。

【助産診断・技術学】

- 5) 女性や家族の健康課題の解決、健康の保持・増進に必要な相談・教育について基本的な理解を

問う。

- 6) 女性のライフサイクル各期における相談・教育活動の実際について基本的な理解を問う。
- 7) 助産に必要な助産診断・技術について基本的な理解を問う。
- 8) 妊娠期の助産診断及び支援について基本的な理解を問う。
- 9) 正常な妊娠経過からの逸脱及びハイリスク状態にある妊婦への支援について基本的な理解を問う。
- 10) 分娩期の助産診断及び正常な経過にある産婦への支援について基本的な理解を問う。
- 11) 正常な分娩経過からの逸脱及びハイリスク状態にある産婦への支援について基本的な理解を問う。
- 12) 助産に必要な緊急時・搬送時の対応について基本的な理解を問う。
- 13) 産褥期の助産診断及び支援についての基本的な理解を問う。
- 14) 正常な産褥経過からの逸脱及びハイリスク状態にある産婦への支援について基本的な理解を問う。
- 15) 妊娠期から産褥期における合併症がある妊産褥婦への支援について基本的な理解を問う。
- 16) 新生児期の助産診断及び支援について基本的な理解を問う。
- 17) 新生児の正常からの逸脱及び異常な症状・状態・疾患がある新生児と家族への支援について基本的な理解を問う。
- 18) 乳幼児の正常発達・発育経過を判断し、それらを促進する支援について基本的な理解を問う。
- 19) 乳幼児に起こる主な疾患及び支援について基本的な理解を問う。
- 20) 低出生体重児・早産児の特徴や疾患及び支援について基本的な理解を問う。

【地域母子保健】

- 21) 母子保健の動向について基本的な理解を問う。
- 22) 母子保健活動及び助産業務を行う上で必要な母子保健行政と母子保健制度・施策について基本的な理解を問う。
- 23) 助産師が行う地域母子保健活動の実際について基本的な理解を問う。

【助産管理】

- 24) 助産管理の基本、助産業務管理、助産所の管理・運営、周産期医療とその安全について基本的な理解を問う。

1. 出題基準 4 群およびタキソノミー別の出題数と割合

「出題基準目標別の問題数とその割合」(表 4) より、出題割合の多い順に、第 109 回は【助産診断・技術学】 60.0% (第 108 回 60.0%、第 107 回 57.3%)、【基礎助産学】 26.4% (第 108 回 27.3%、第 107 回 25.5%)、【助産管理】 10.0% (第 108 回 9.1%、第 107 回 12.7%)、【地域母子保健】 3.6% (第 108 回 3.6%、第 107 回 4.5%) となっており、【基礎助産学】の割合が第 108 回と比べるとやや減少し、【助産管理】の割合が微増していた。【助産診断・技術学】【地域母子保健】の割合は同じであった。

また、タキソノミー分類は、タキソノミー I 型 49 問 (44.5%) (第 108 回 50 問、45.4%)、I' 型 15 問 (13.6%) (第 108 回 22 問、20.0%)、II 型 25 問 (22.8%) (第 108 回 20 問、18.2%)、III 型 21 問 (19.1%) (第 108 回 18 問、16.4%) であった。タキソノミー I 型 (知識の想起・推定によって解答できる問題) の割合が最も多かったことは、第 108 回と同様であった。また、タキソノミー II・III 型の問題は 46 問で全体の 41.9% であり、前回 (第 108 回、38 問) の 34.6% と比べ増加 (7.3 パーセントポイント [以下 ppt] 増) していた。

2. 出題基準 4 群ごとの目標別の出題数と割合

1) 【基礎助産学】

問題の割合は、29 問（タキソノミー I・I' 型 24 問、II・III 型 5 問）で全体の 26.4%であった。その内訳では、「女性の健康支援のための基本理解」（1.8ppt 増）および「周産期の正常経過等の基本理解」（0.9ppt 減）に関する問題の割合が各 10.0%と最も多く、次いで「リプロダクティブ・ヘルス支援の基本理解」に関する問題（2.8ppt 減）、「基本概念と変遷、基本姿勢」に関する問題（0.9ppt 増）の順であった。

2) 【助産診断・技術学】

問題の割合は、66 問（タキソノミー I・I' 型 31 問、II・III 型 35 問）で全体の 60.0%であった。問題数は、時期等の分類別では妊娠期（21 問）、分娩期および新生児期（各 13 問）、乳幼児期（6 問）、低出生体重児（4 問）、産褥期（3 問）の順に多かった。また、各時期（乳幼児期、低出生体重児を除く）でみた「正常からの逸脱・ハイリスクの支援」の問題の割合は、妊娠期（1.0ppt 減）、分娩期および産褥期（各 1.8ppt 減）で減少していたが、新生児期は同じであった。

【助産診断・技術学 I】では、「相談教育の基本理解」に関する問題は第 108 回 1 問（0.9%）であったが、今回は出題されていなかった。「ライフサイクル各期の相談教育活動」に関する問題は 4 問（3.6%）であり、第 108 回 2 問（1.8%）と比べ倍増していた。「

【助産診断・技術学 II】では、「助産診断・技術の基本理解」に関する問題は、第 108 回は出題されていなかったが、今回は 2 問（1.8%）出題されていた。また、＜妊娠期の診断とケアに関する問題＞の割合が最も多く、21 問（タキソノミー I・I' 型 7 問、II・III 型 14 問）で全体の 19.1%であり、前回（第 108 回）の 19.2%と比べやや減少していた。そのうち、「正常な妊娠経過からの逸脱及びハイリスク妊婦への支援」に関する問題は 12 問（10.9%）であり、第 108 回 13 問（11.9%）からやや減少していた。また、「妊娠期の助産診断と支援」に関する問題は 9 問（8.2%）であり、第 108 回（8 問、7.3%）と比べ微増していた。

＜分娩期の診断とケアに関する問題＞および＜新生児期の診断とケアに関する問題＞の割合が 2 番目に多かった。＜分娩期診断とケアに関する問題＞は 13 問（タキソノミー I・I' 型 6 問、II・III 型 7 問）で全体の 11.8%であり、前回（第 108 回）の 15.5%と比べて減少（3.6ppt 減）していた。そのうち、「分娩期の正常経過の助産診断と支援」に関する問題は 7 問（6.4%）であり、第 108 回（8 問、7.3%）と比べやや減少していた。また、「正常な分娩経過からの逸脱及びハイリスク産婦への支援」に関する問題は 6 問（5.5%）であり、第 108 回（8 問、7.3%）と比べ減少していた。「緊急時・搬送時の対応」に関する問題の出題はなく、第 108 回（1 問、0.9%）から減少していた。

＜新生児期の診断とケアに関する問題＞は 13 問（タキソノミー I・I' 型 9 問、II・III 型 4 問）で全体の 11.8%であり、第 108 回（11 問、10.0%）と比べて増加していた。そのうち、「正常な経過からの逸脱及びハイリスク新生児への支援」に関する問題が 8 問（7.3%）であり、第 108 回（8 問、7.3%）と同じ割合であった。また、「新生児の助産診断と支援」に関する問題が 5 問（4.5%）であり、第 108 回（3 問、2.7%）と比べて増加していた。

＜乳幼児期の診断とケアに関する問題＞の割合は 4 番目に多く、6 問（タキソノミー I' 型 4 問、II 型 2 問）で全体の 5.4%であり、前回（第 108 回）の 2.7%と比べて倍増していた。そのうち「乳幼児の正常発達・発育の判断と支援」に関する問題は 3 問（2.7%）で、第 108 回（1 問、0.9%）の 3 倍増となっていた。また、「乳幼児の疾患と支援」に関する問題は 3 問（2.7%）で、第 108 回（2 問、1.8%）と比べて増加していた。

＜低出生体重児、早産児の特徴・疾患・支援に関する問題＞は5番目に多く、4問（タキソノミーⅠ型1問、Ⅱ・Ⅲ型3問）で全体の3.6%であり、第108回（5問、4.5%）と比べてやや減少していた。

＜産褥期の診断とケアに関する問題＞の割合は最も少なく、3問（タキソノミーⅠ型1問、Ⅱ・Ⅲ型2問）で全体の2.7%であり、第108回（6問、5.4%）から半減していた。また、「周産期の合併症への支援」に関する問題は、出題されていなかった。

3) 【地域母子保健】

問題の割合は、4問（タキソノミーⅠ型2問、Ⅱ・Ⅲ型2問）で全体の3.6%であり、前回（第108回3.6%）と同じであった。そのうち、「助産師が行う地域母子保健活動の実際」に関する問題が最も多く、第108回（1問、0.9%）から倍増していた。また、「母子保健の動向」に関する問題は1問（0.9%）で前回と同じであったが、「母子保健行政と母子保健制度・施策」に関する問題は1問（0.9%）であり、第108回（2問、1.8%）と比べて半減していた。

4) 【助産管理】

問題の割合は、11問（タキソノミーⅠ・Ⅰ型7問、Ⅱ・Ⅲ型4問）で全体の10.0%であり、第108回（10問、9.1%）と比べ微増していた。

Ⅲ. 助産師免許付与に必要な能力（レベル）を測定する問題か否か

「出題基準（小項目）別にみた出題数と割合」（表3）、「出題基準目標別の問題数とその割合」（表4）より、タキソノミーⅠ型の全体に占める割合（44.5%）が最多であったことは、第108回（45.4%）と同様であった。タキソノミーⅠ・Ⅰ型の主に知識を問う問題の割合は58.1%であり、第108回（65.4%）から7.3ppt減少した。内訳をみると、タキソノミーⅠ型の割合は前回より0.9ppt、Ⅰ型の割合は6.4ppt減少していた。一方、タキソノミーⅡ型の割合は前回より4.6ppt、Ⅲ型の割合は2.7ppt増加していた。

出題内容では、助産実践の基礎となる妊娠・分娩・産褥経過と新生児・乳幼児・低出生体重児に関する正常および正常からの逸脱の予測と判断、異常に関する基本的な知識や支援に関する問題が出題されていた。【助産診断・技術学】からの出題では、「正常からの逸脱の予測と判断・ハイリスクの支援」に関する出題の割合が、「正常経過の助産診断と支援」に関する出題の割合を上回っていたのは、新生児期（2.8ppt差）と妊娠期（2.7ppt差）であった。

また、女性の健康支援のための基本理解、周産期の正常経過等の基本理解、妊娠期の助産診断と支援、分娩期の正常経過の助産診断と支援、産褥期の助産診断と支援、正常な産褥経過からの逸脱及びハイリスク褥婦への支援、新生児期の助産診断と支援、正常な経過からの逸脱及びハイリスク新生児への支援、乳幼児の正常発達・発育の判断と支援、乳幼児の疾患と支援、低出生体重児・早産児の特徴・疾患・支援、母子保健の動向、母子保健行政と母子保健制度・施策、助産師が行う地域母子保健活動の実際、助産業務管理・運営に関する問題など、今日の助産を取り巻く課題とニーズに合致した内容が出題されていた。

今回の出題問題のテーマ、タキソノミー分類別の割合の変化は、今日の助産を取り巻く状況に応じたものであり、助産師免許付与に必要な能力（レベル）を測定する問題として適切である。

総括

1. 出題問題の検討については、1問（午後問題31）を不適切問題と判断した。
2. 全体的に、設問には解答に必要な情報が適切に記述され、出題の意図が明確で基本的知識を問う問題が多かった。
3. 明らかに誤りと思われる選択肢を含む問題、専門的な知識がなくても容易に解答できる問題（午前問

題 18)、設問の意図と整合性がない選択肢が含まれている問題（午後問題 40）もみられた。

4. 視覚素材を用いた問題は 5 問であり、前回（7 問）より 2 問減少した。胎児心拍数陣痛図を示した問題は 1 問出題されていたが、陣痛図の判読を問う問題であり、胎児心拍数波形の判読およびレベル分類に関して、臨床で求められる診断能力を測る設問ではなかった。
5. タキソノミー分類別の出題問題の割合では、タキソノミー I 型（知識の想起・推定によって解答できる問題）の割合が最も多かったことは、第 108 回と同様であった。今回も前回（第 108 回）および前々回（第 107 回）と同様に、基本的知識の確認に重点を置いた出題傾向であった。
6. 出題内容では、助産実践の基礎となる妊娠・分娩・産褥経過と新生児・乳幼児に関する正常および正常からの逸脱の予測と判断、異常に関する基本的な知識や支援に関する問題が出題されていた。特に、【助産診断・技術学】からの出題では、「正常からの逸脱の予測と判断・ハイリスクの支援」に関する出題の割合が、「正常経過の助産診断と支援」に関する出題の割合より上回っていたのは、新生児期および妊娠期であった。
7. 昨今の助産を取り巻く社会背景を反映し、ハイリスク妊産婦・新生児および低出生体重児の助産診断と支援能力を問う出題が特徴的であった。合併症妊娠に関する出題が多くみられた半面、正常分娩経過の診断や産褥期に関する出題は限定的であった。また、地域での育児支援を含む、切れ目のない一貫した母子健康支援の実践能力が助産師に求められていることから、乳幼児の正常発達や小児感染症・ワクチンに関する出題数が増加した。ウィメンズヘルス領域においては、プレコンセプションケアやライフサイクル各期の女性に関する問題が出題されたが、不妊に関しては定義・知識の確認にとどまり、ケアの実践を問う内容はみられなかった。なお、疫学に関する出題は、人工妊娠中絶実施率の年齢階級別推移を問う 1 問のみであった。

以上より、第 109 回助産師国家試験問題は、助産師免許付与に必要な能力（レベル）を測定する問題として適切である。

以